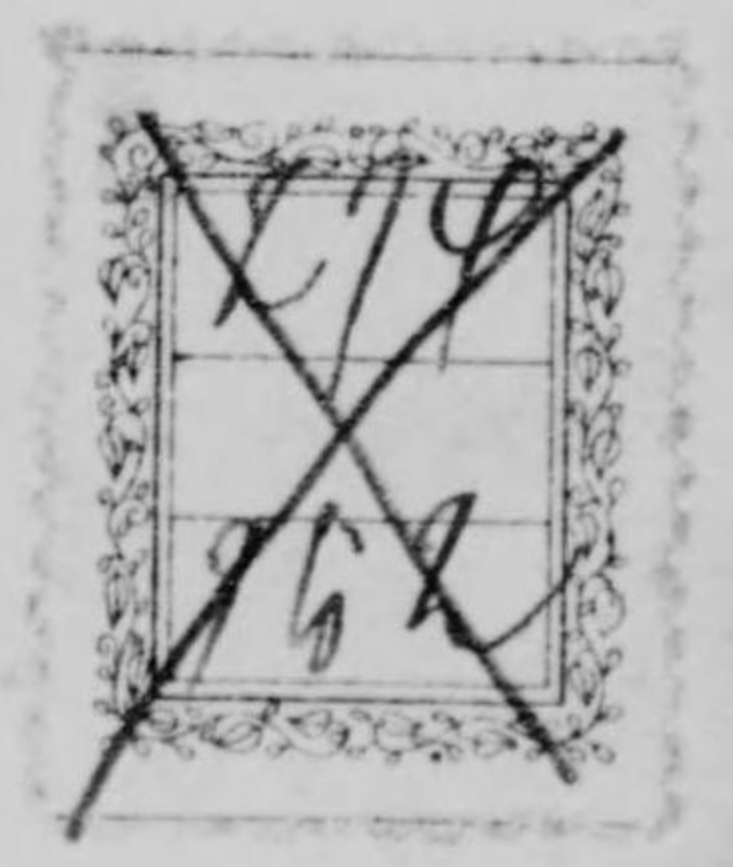


特279
101

武田彌富久氏著

立教百年祭記念

黒住教信徒成功談



始



特279-101



神の忠宗祖教の演講御で袴破衣綿

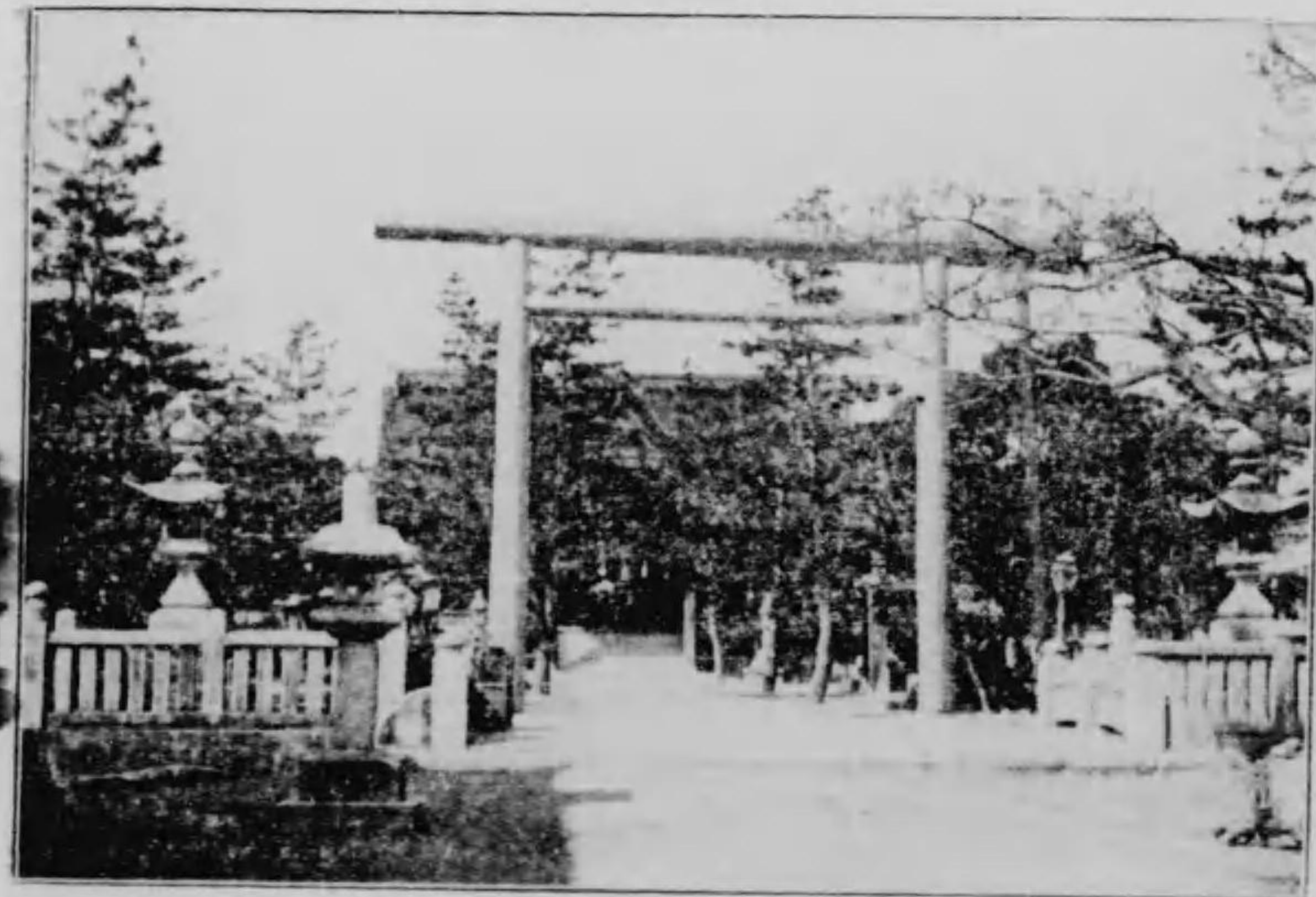
日之如也
 一 神在也
 一 腹之至物之至也
 一 心之海也
 一 心之惠也
 一 身之梅也
 一 漱之也
 一 日之如也
 一 君之除也
 也之也
 主向也
 如也

はしかき

黒住教祖は「此方が瀬踏みをする、皆さま付いてお出でなされ」云はれき、此編は教祖の主意を奉じて人間の正當に行き着くべき處、人生に於て正當に探るべき道を瀬踏し、而してその足跡を付けた先輩を傳へたるものなり、案内者のある道は誰の足にも踏み安し人々此の書を読み、先輩諸氏の付けられたる足跡を履みもて進まばやかて成功の岸に達せん、同時に人の



京都吉田神樂岡宗忠神社



岡山元宗忠神社

人たる道に入り得ん、讀む人心して道草を食ふ事な
れ、

寅甲春三月

渡邊霞亭

目次

教祖の御肖像……………(寫眞版)

家憲御七箇條……………(寫眞版)

岡山大元宗忠神社……………(寫眞版)

京都吉田山神樂岡宗忠神社……………(寫眞版)

立教百年記念祭唱歌……………

名譽長壽財産三徳家の攝津大椽二見金助翁……………

同夫人高子……………

縞モスリン開山岡島千代造翁……………

同夫人スエ子(菊子)……………

隠れたる徳行家生駒權七翁……………

紡績の元祖平野平兵衛翁……………

○目次

尼崎汽船創の立者と尼崎伊三郎翁……………二五

御道的商業家那須藤助翁……………三

同夫人……………三

同陸軍大尉那須又三氏……………三

同別家六戸……………三

不言の實行者岡橋清左衛門翁……………五

鐵道翁大塚磨氏と道の葉三十言……………五

隠れたる篤志家大村直七翁……………六

黒住教立教百年記念祭唱歌

冬 至 の 光 神 の 子 こ
 生 れ た ま ひ し 宗 忠 の
 威 徳 ま す く あ ら は れ て
 立 教 百 年 記 念 祭
 ○ 神 人 不 二 こ き く か ら に

吸ふや心は清く朝ごに
つ陽氣の充ち満ちて
も樂しきこの教

實踐窮行忠孝の
道よりのつゞく一すちの
活氣はあふれつゝ
いつつも尊きこの教

黒住教信徒成功談

武田不動著

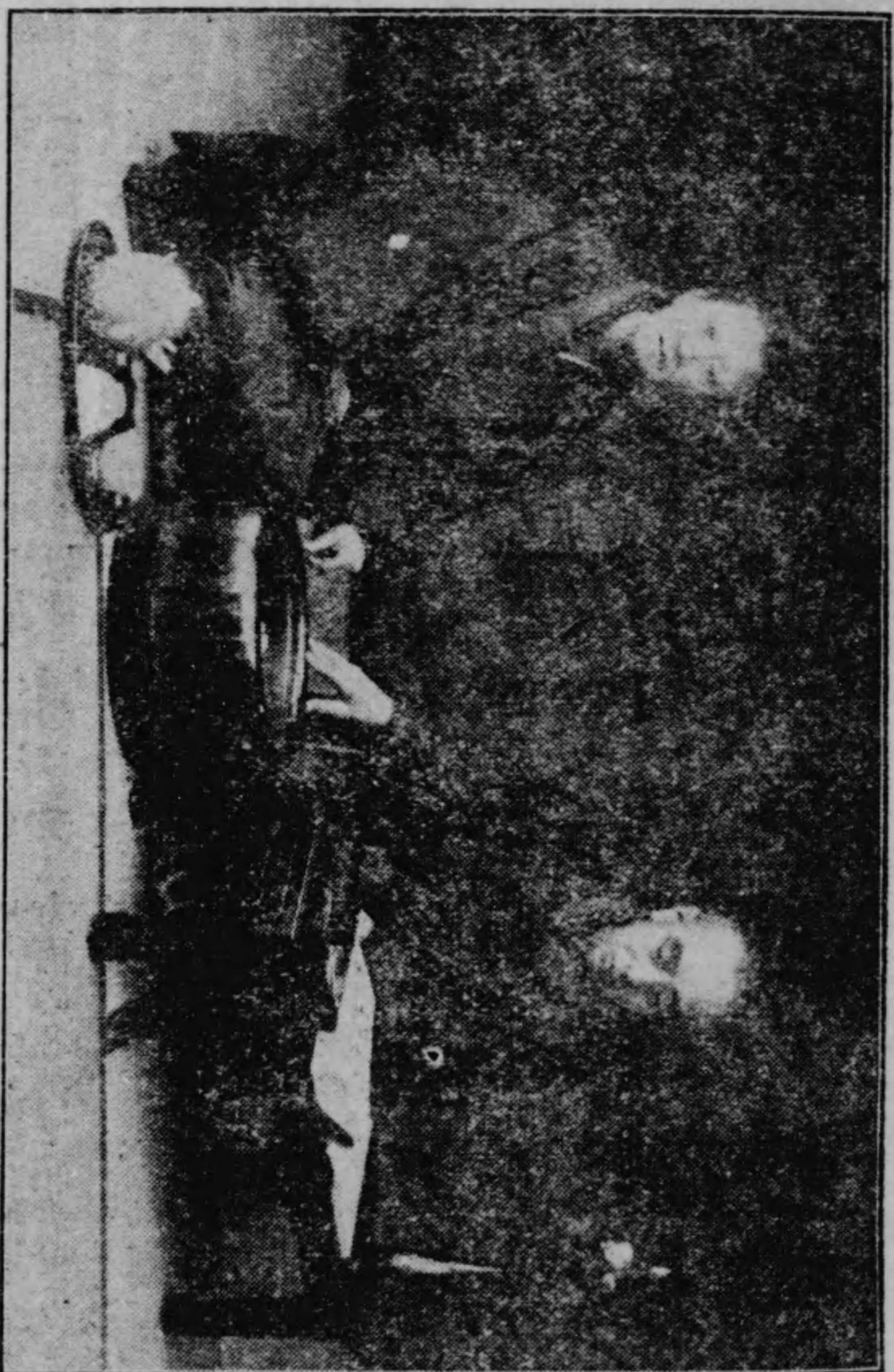
●名譽、長壽、 財産三徳家の 攝津大椽二見金助翁

今の淨瑠璃界の王さまとも稱すべき攝津大椽こと二見金助翁は大阪市西區土佐堀裏町一丁目の紳士である。只今は財産をウンと貯めて黒住教堂島教會所に参つたり、須磨の別荘に遊んだり、一百二人の弟子等に天照大御神のお道やら教祖宗忠の神の教を訓示したりして日々樂しゆんで日を送つて居られる。

○黒住教信徒成功談

○墨住教信徒成功談

二見金助翁の前身は日本全國三歳の兒童でも知つて居る、天下一品の
藝人である。道頓堀の櫓は高し、五座の芝居は賑つたどて大阪は愚か恐
らく、日本國中に一代成功者で品行もよく、人格も高い、相當の教育も
あつて國家に盡し、社會に盡し爾して財産がドツさり有り、其上に年は
といへば、翁は七十九才、夫人高子も七十九才で夫婦共大元氣で、こん
なに何も歎も揃つた藝人は鐘太鼓で探したどて決してあるまい。如何し
てく藝人ごころの騒ぎで無い、祖先傳來の紳士中にもこれだけ揃つた
方は五千萬の同胞中にもさう澤山はあるまいと思はれる。であるから私
はこの立教百年と云ふお目出度き祝祭の記念に此夫婦のことを劈頭に掲
げて皆さんに綾借て頂だかうと思ふのである。ろもそも攝津大椽二見金
助翁の一世一代のことを文藝の趣味を以て掲ぐれば却々面白いかなれど



子 高 人 夫 椽 大 津 攝

私は茲には娛樂と申すよりは少し訓育と云ふ方面の心持で紹介せうと思ふが故に趣味あらんよりも事實の正確を基とせうと存じますから一寸御断りして置こう。偕て淨瑠璃と申せば常盤津、清元、一中、新内、大薩摩、河東もみなこれを稱して淨瑠璃と申すことは皆さんも承知でありませう。所が獨り義太夫節をさして淨瑠璃というやうに成つたのは攝津大椽二見金助翁の活動全勢にグツと高く成り、この時代五十年間の稱呼らしい、御承知の大阪は義太夫の根源地で本場と申すでせう、今から二百三十年程前寛文年間(1761-1770)に井上播磨椽か開祖で大阪一流の淨瑠璃の確定したのは竹本義太夫と申すことで、この長年月の間には斯道(しだう)のみの偉い人は折々あつたようではありませんけれども今の攝津大椽二見金助翁のやうに何も駄も揃つた人は無いやうで實に大阪文藝界に立つ人の肩身を廣うし

たのは二見翁であると誰でも言つて居る、成程他の藝人と違つて男子の義太夫の賤しくない所のあるのは二見金助翁が與かつて力ありと言つて可い、如何してこんな偉い空前の人物を作り出したかというに大に原因ありである、それは何かと云に女房お高さんの宗教撰擇が良かつたからである、詳しく記せば大に後進の信者も藝術家も参考と成ることが多いが少しばかり左に掲げよう。

攝津大椽二見金助翁は今より七十九年前の三月十五日に南區順慶町三丁目塗物問屋伊勢屋に生れた、父は森七三郎、母はお久といふた、翁の幼名は吉太郎と呼ぶ然るに母お久は都合あつて吉太郎を連れて實家に戻る、夫から五才の時に釣鐘町上ノ町の貧乏大工大和屋事二見伊八方に貰はれ龜次郎と改めた、これを實に淨瑠璃界に足を踏入れた第一歩である

けれども親爺は淨瑠璃で渡世させようとは少しも考へては居らぬから大
 工仕事を教へて見るが其時代は今の様に健全な身体で無く始終弱ひから
 少しも物にならぬ、詮方無く刀職の柄巻を習はして見たが何をしても面
 白くない、所が親爺は大の素人淨瑠璃すき者であるから娛樂に吉太郎に
 も地歌の三味線に淨瑠璃の三味線を稽古させて見ると好いて熱心に遣る
 夫から竹澤龍之助と云うに就きて學ばせる、爾來此間にいろく變化が
 あるが詰り藝人の決心をして南部太夫と稱し初舞臺に現れたのは二十三
 才の時であつた、其後江戸に行き越路太夫と改稱したのである、諸君こ
 れから一層注意して讀んで頂きたい、夫人お高さんが二十九歳の時堂島
 に伊勢神宮黒住講社のお席といふて伊勢の太神宮様と備前の宗忠太明神
 様と祭つて伊達寛左衛門と云ふ先生が神道の講釋を成されて神、君、親

のありがたき道やら教を説ひて聽かせて居らるゝので、これを聽けば人
 の心の用ひ方が改まり家の病ひ、身の疾ひ、心の病も治り家も整ひ身も
 修まると聞き澤山な人が參詣する、お高さん参りたいが養父の伊八も養
 母のおこつても信心氣の無いゆゑ湯に遣つて頂くと云ふて暇を貰ひ參詣し
 て聽て見たが成程爲になること計りであるが是迄聽き覺わの無い事が多
 いから耳に止らぬ辛い、けれども詰らぬ所に遊ぶよりは家の爲めと心
 得欠さず參詣してとろく二年程に有り難い信者になつたのである、そ
 こで金助翁に勧め、お席に案内すること度々であつたが、とろく又金
 助翁も信者に入門したのは三十二才の時であつた、併し何を感じて入門
 したかといへば、それは澤山あるが中にも斯道は萬道の源であるが故に
 藝術を修練する人は奥義を覺悟り一心に一道を修行する人は神、儒、佛

にかゝはらず各其の道の妙理を發明する云々。そこでつらく思ふ、これが活物を自得る入口だらうと合點し、これより藝術にも信仰にも疑を去り舞臺に出る前に御神前を拜し見臺に坐ると心の中に天照大御神と教祖宗忠の神さまを拜し口の中で言玉を幸ひ給へ『身も我れも心も捨て、たつた一つの誠ばかりで語らしめ玉へと祈りて語ると云ふ摺梅に少しも神の教を脱せず、欠さず實行し、金銭萬端一切の責任は持てご悉皆夫人高子に任せ、一心に藝術に修練したが果せるかな天下一品、天下の名人と呼ばれ誰も真似の出来ぬ獨流を發起し夫の文樂座の成功も二見金助翁の力である、畏れ多くも各宮殿下の御氣に召し屢次御前淨瑠璃を拜演し勿体なくも小松宮殿下より攝津大椽を賜り名聲天下に鳴り渡り飛ぶ鳥も落つる勢いで今日あるを致した、こは神の教に従ひ養父母に孝養を盡し

たのと萬事に誠の結果である、されば昨年目出度藝術を廢業し今は夫婦連で紳士株と交り、一流の紳士連と往復して樂しみ尤も夫人高子は活きくした若き快辯を操つて御道を訓育して居らるゝ此様を人々は見て二見さん夫婦はあの丁子だつたら未だ百も二百も長壽しやつしやると評判高めるのは返すくも芽出たしである。

ここに今一つだけ掲げて置きたいのは、明治十八年の春のこと、東京で興行中蠣殻町の大火に遭つた時二見夫婦は天照大御神の御神號を携へ物干に登り自己の危難を顧りみずに市民を救ひ助けんといふ大なる誠心を備へ二人り揃へて神言の大祓を必死に成つて唱へて居ると消防組は斯く大なる真心を以て他人を助けの爲めに登つて居られるとは夢更知らず越路太夫夫婦は氣が違つて居る早く登つて助けてやらうと一生懸命に成

れど一向平氣で個様の場合に生命が惜くては他を助けられん、焼死しても構はぬ、捨て置きといふ大決心に愈々發狂と思ひ濟し遁げて仕舞つて傍らで守りして居たが我を離れて人を助けんとした立派な誠は大御神も感納しましたと見へ最初西の風が俄に北の風に變じ、お蔭で二見夫婦の居られた家と隣五戸は全く残つたそうで、其喜びの餘り二見夫婦は一般罹災者に尙百圓を義捐した、所が今度は生神さま扱にしてくれた、時の東京府知事よりも三組金盃を頂く併しこんな事は幾度もあつたらしい始終個様の心掛けであるから一代に立派な紳士に成つたのも決して偶然では無い

●縞モスリン開山岡島家夫婦

大阪市北區中の島四丁目の岡島千代造さんはモスリン友禪染の元祖、縞モスリンの開山、モスリン友禪の輸入を防禦して國利を計、勅定の縁授褒章を頂いた人である、黒住教を信じ天照大御神を尊信し國民たる者は伊勢神宮を中心とせざれば國家は發展せずと常に唸り年々何回と無く臍線金を投じて人を伊勢に連れて往く、明治三十三年、畏れ多くも今上天皇陛下、皇太子殿下にあらせられる時、妃殿下册立御慶事の節御慶事奉祝、黒住教千人参りを企て七五三繩を張り球燈を掲げ音楽体を載た満車飾の別仕立、汽車を二列車も出し大阪から伊勢迄騒がし大に其名を高くし一層男振りを擧げた、爾來今日迄毎年一回も欠かさず實行しつゝ

○黒住教信徒成功談

ある、黒住教千人團再興の開山はモスリン翁と深田松之助、安木庄兵衛、島村徳兵衛及び某等與つて力ありじや、近來は手塚、小松、青山、井上、田月、山口、梶川其他の諸氏大に力を入れ生通しに實行してゆくの、教祖宗忠の神もお喜びであるから、ますく人氣が可い、成らう事なら最初数年間のやうに管長も新聞記者も請待し、音楽隊も入れて頂きたい話が枝葉に脱したから本に戻ります。

稿モスリン翁は其前に四十人餘りを岡山大元の宗忠神社に參らせて人を喜ばし自分も喜んで居たが今は忘れて仕舞つて隠徳にして居る黒住教順慶町教會所が明治三十七年に九千圓程移轉建設費で借金のあつた際七尾駒吉、矢田九平、柳田幾次郎等とウンと深田松之助氏に力を入れ六十六名の天心會員を募り一致盡力した結果、今日は一厘も借金無しに

した、それ所の願きでは無い、同教會所は二萬圓近くの不動産が出来て信徒の共有物と成つてある。

稿モスリン翁の偉いのはモ一つある前年社會主義の馬鹿者が現れた時大に驚きいろく考へた上、國學院大學を盛んにすれば、こんな馬鹿者は出来るものか、と言つて十萬圓程寄附の大きな講を造り、心に成つてドシく學資金を貢で居る、此外に公共の事に骨身を惜まずに奔走盡力して居る事は數限り無いから此位で筆を止める。

夫人岡島スエ子は親爺より偉い所が澤山ある、婦人でこうあれ常に沈黙考して爲す事として人を感動せしめる事が多い、折々新聞で見たりれども此婦人は大の隱徳家で口外はせぬ、明治天皇さまは我國体に基き遊ばされ萬事神式に復古遊したと承るや主人に率先し實家の長男岡島九

○黒住教信徒成功談

一郎氏方の祖先を神式に改祭して仕舞つた、黒住教堀江教會所は假設で大阪中でお粗末なのを氣にし、教會所がお粗末では祭神天照大御神に相濟ぬは申迄も無きが多くの人を教化させぬヨシ、妾が率先し内密で金千圓丈け臍線の中より出しますから十年計畫で立派なものを新築して下さいと言つて四年程前、松田擔任教師に投り出した側の信者も大元氣に成り、これが動機と成つて新築することに成つて奔走中である。

夫から關西中學校が本教團に買収すると聞くや平手を拍つて喜び、さやう社會的の事業を進んで遣らねは如何してもお道は發展しませぬ、親爺さんに内密で三百圓を臍線の中より出して喜んで居る、ところが茲に面白いのはそれとは知らず。校長福井彦次郎氏は主人千代造氏に禮狀を出すと流石は千代造氏怒る所かヲイおきく己よりお前は偉いナア。

さて縞モスリン翁夫婦は、こんな偉い人に成り大阪の實業界をも左右するやうに成つた其元はどへは主人は大和より裸一貫で来て心齋橋筋五龍圓浮田桂造さんの丁稚から米屋に成り、千辛萬苦し今日あるを致したのである、其心掛の變つた点は前記の外に澤山ある中に青年時代一つだけ書てみやう、一萬圓の財産が出来た迄絹のものは一切身につけぬ、と言つて綿服主義、シテ何事もお伊勢さんに申上げ心にお伊勢さんのお許しが無ければせぬと言ふ流儀、年中家庭は圓満、いやとこそせ……よいやなで……伊勢まいり芽出たし〜。

●隠れたる徳行家生駒權七翁

大阪市東區高麗橋四丁目の時計及び貴金屬商生駒商店といへば知つて居る人はあるけれど主人生駒權七翁は如何な性格の人であるかといふ事に至つては近來迄餘り知つて居る人は尠ない、それは尤もである萬事が挖目で百のものは二三十位より見せぬ質で殊に隱徳主義であれば決して世間に現はさぬ空理は嫌ひ、空論はせぬ、勿論嘘は大禁物で一言半句の言葉でも責任を以て口外するといふ頗る堅實の遣り方である其商賣も正札掛直なしといふたら一厘も上げたり下げたりはせぬ、時日の經ぬ中で使用せぬ前なれば何時でも戻りは聞く引替はして呉れるといふ、安心な店である、これは主人商賣開始以來何十年も、ズツと通し來つた美風である、だから家運は朝日の豊坂登る勢である、と岡山の經世雜誌にも書いてあり昨年の大阪朝日新聞に百萬圓以上の長者鑑にも見へてあつた、穩

れたる徳行家と題し大阪日々新聞にも三百萬圓の資産ありと記されていた、其外靜岡縣の新聞やら各地の雜誌にも徳行と財産が掲げられてあつた、主人は當年六十四歳なれど多くの番頭店員等を指揮し紳士の体面を保ち正義と信用を重んじ、商業界に戦はせて居る、此年に成れど讀書と徳行の修養は一日も怠らぬ漢學はあり、國學も少しはある、現代の書も調べている、心に年は寄せず氣分を新しくして修養心と勉勵心は少しも緩まさぬ、であるから精神的の事も家運と均しく日進月歩である、併し經濟上に就ても我身を責め無益な死に錢は決して出さぬ、爾して社會を利するとか國家を益するとかいふ活きた金は思ひ切つて出す最近の一例を示せば昨年『明治天皇御聖徳』と題する結構な書物二萬部ばかり匿名で官吏、全國圖書館、學校生徒、實業及び宗教團體等に施し又捲煙草消の

三徳といふものを無名で世に施こして居る、これは世間が養澤に成り捲煙草を喫み又は喫み過して衛生に害のあること、火の用慎の悪きこと、も九年間社會の爲めに研究し、どうも世に説明書と共に施し、發表した有益なものである、尙黒住教立教百年祭と聞き黙つて三百圓を寄附した。

翁は今から五十二年前には丁稚奉公をして居た人である、偶々『家職要道』といふ書物を繕きて奉公人根柢は取れ、後黒住教祖宗忠の神の教を信じ迷信で無い正しき宗忠の神の訓育で志を立て物知りに傾むかず、一心に不言實行の結果一世一代に長者鑑に加つたのである、實業紳士も澤山あるが、これだけ素養あり、禮儀も正しく人格もズツと高き一代成功者は尠からう。

●紡績の元祖平野平兵衛翁

贈權大教正平野平兵衛翁は大阪市東區備後町三丁目の現代平野平兵衛氏より三代前の主人である、大阪實業界に大に覇振りを利かせた人で文字あり、頭腦は却々明晰であつた人である、明治の初年は紡績も銀行も皆政府の事業で株式會社などはチツとも行はれていながつた、平兵衛さん一代に成功し金はウンとあり、實業界に信用あり、堅實の遣り方であれば時代の要求に應じ親族の金澤仁兵衛、金澤仁作、竹尾治右衛門等諸氏と發起し大阪及び附近あらゆる紡績會社を創立し成功せしめた元祖である、銀行も國立であつたのを株式組織で二三創立し成功せしめた、其他商工業會社の設立して成功を遂げてあるのは數知れぬ個人としては糸

店もあり石油店等澤山ある。

社会的の事業としては汎愛扶殖會といふ慈善事業は翁の力最も與りありである、翁は又黒住教の篤信者で天照大御神を非常に信仰が深い國家の中心点は伊勢神宮と皇室を頂き社會の中心点は岡山大元の宗忠神社である、だから大阪に黒住教の擴張を斗り自分の控家西區榎の大家屋を黒住教分局に無料にて貸し多くの雑用から教導職の手當旅費迄も手元より出し尙順慶町教會所と堂島の教會所、新町教會所等に布教費を寄附し大に大阪府下の布教に熱心したのである、であるから明治時代に大阪府下に黒住教徒を作つたのは平野さんの力であつたと私は言ひたい、隨分大阪府下黒住教發展の大功勞者である、吾等も青年時代に平野さんや那須さんに大に訓育を受けた、薰陶を受けた者も澤山ある、平野さんには

こんな美談が澤山ある、或日暮に石油店の店員が石油を賣て居最中に平野さんは見廻りに見へ店員に命じ五厘一錢で買に来る客に早く賣渡せて遣れ一升も二升も買に来た客を後にせよと密と仰しやつて毎例此通りにせよと言はるゝので合点がゆかぬ、澤山利益を下さる方が大切で五厘一錢の客は邪摩醜いが常に徳行の主人だからとて譯を聞て見ると主人曰く一升二升の客は宅に未だ餘祐がある、五厘一錢の客は直ぐ點燈せねばならぬから早く渡せて遣れと言はれたに敬服したさうである、又或時人に語つて曰く市中を散歩し一圓の金を費消見よと思つても天の御擬作の金である、天照大御神の預りものであると思ふと思ひやうが無かつたと語られた、一代に大紳士に成功する人の心掛けは違つたものである。

平野平兵衛さんは遠州の生れである、二十歳あまりの頃、裸一貫で大

阪に來て勝間の商家に奉公したのが商人に成る第一歩であつた後大阪に出で堂島の黒住講のお席に參り伊達先生の説教を聴聞して眞理をグツと腹に容れ實踐窮行の結果、堅い人である、正直な人である、何を約束しても時日は違はぬ、勉強家である、と言つて大に信用を得た、一事一業も教祖宗忠の神の教を外した事の無いといふ模範的實行者であつた、果せるかな天此誠の實業者を助け一代に數百萬圓の富を興へ玉ふた、今日は住友、藤田、鴻池の次に指を屈らるゝといふ船場の大長者株、翁歸幽昇天の際「お道を守れ誠を取外すな」とのみ遺言したそうな……功勞により權大教正を贈られた、三代の平兵衛さん祖先の道風に從ひ信仰厚し、先年黒住教堂島教會所新築の際用地百坪餘時價壹萬餘圓を寄附して喜んでござるううな、何と偉いものではありませぬか、殊にお道は實行者が

最後の勝利を占める皆此通りで疑ふ餘地は無いらう。

序に或日黒住教の教師信徒等が會合の後、宴會の席上流行節を謡うもあれば踊る人もあつたが一代に成功する人は出太魚目の戲談でも今日と成つて夫是考へて見ると豫言と成つた、當らすとも遠からずであらう、序でだから笑話に書て置たい。

(山田迪吉)

●神風平野より吹き起り人の心を蔽ふも快し

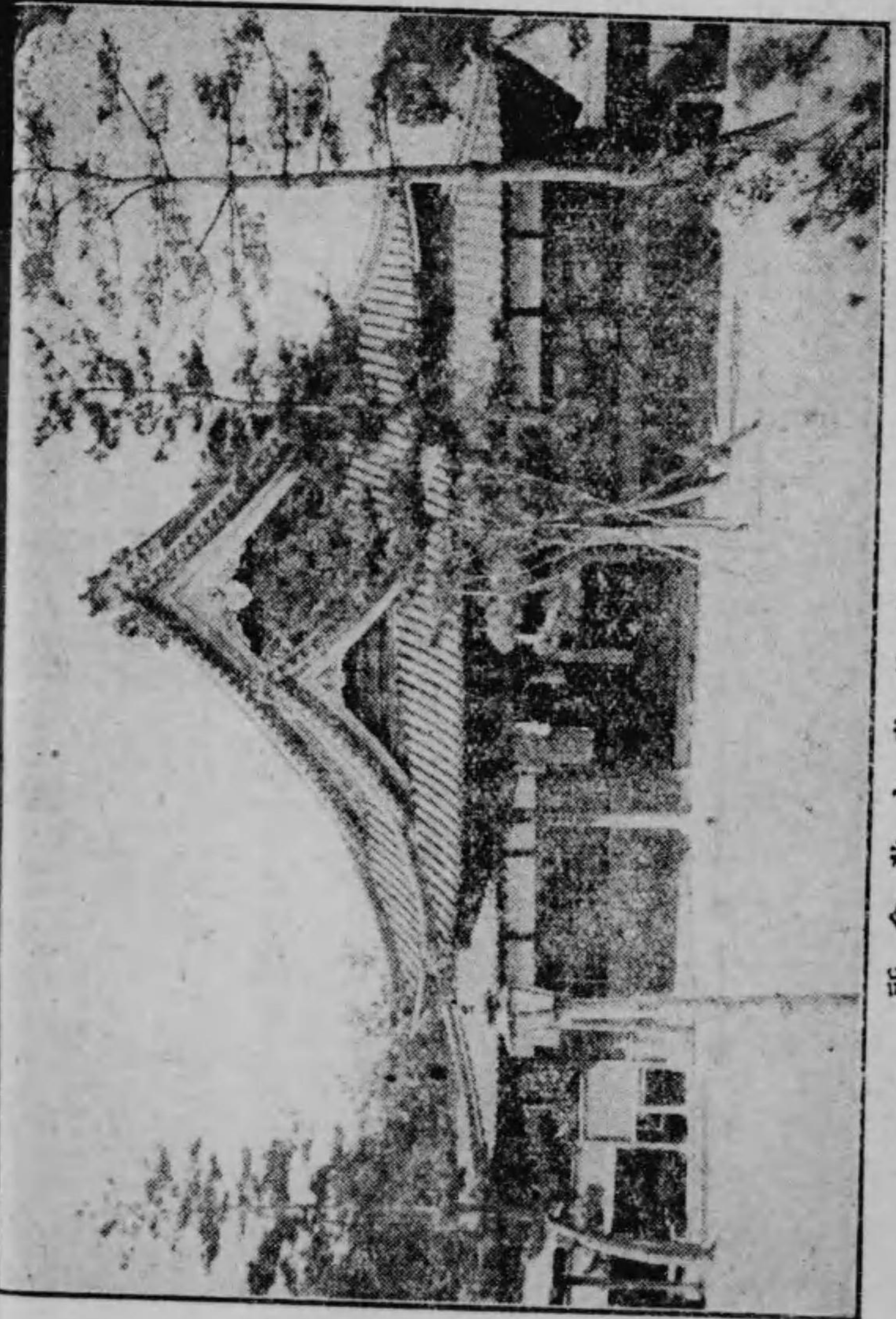
(那須藤助)

●平兵衛が種を蒔く三代の後に芽が出る

(平野平兵衛)

●賣りの蔓に那須が生る

國山大穴黒住教大教會所



(教祖詠)

天照す神の御徳を世の人に

残らず早く知らせたきもの

月は入り日の今出る曉に

我こそ道の初なりける

尼崎汽船の創立者と御七箇條

單に故尼崎伊三郎氏と記せば、ははあ聞いたことがある、耳にした覺
 わがある位であれど、今の大阪府多額納税者貴族院議員尼崎伊三郎氏の
 養父で、毎日諸新聞に出帆の廣告ある、尼崎汽船の前の船主であると申
 せば、判つた〜と三歳の兒童でも領く偉い隠居さんである、大隠居さ
 んと言へば語弊があるが、これは最後大阪市民が翁に奉つた尊稱であり

○黒住教信徒成功談

ます。

翁は姿は天保式で頭は文明的の大活動家であつた。未だく住友藤田等の諸大家が、今のやうに活動せないので冬は炬燵の守をし夏は涼しい所で晝寝して居らるる時代に、奇抜に活動して、肴の荒行商より我國最初の淀川の川蒸汽と言ふた時代に、同汽船の船長と成りて實驗し、夫より刻苦經營して、船主と成つた事業が時運に適せる所へ、翁の幸運と相待ち家は年に月に榮へ、加ふるに養子豊太郎（現代主人）養女歌子（當主夫人）の誠孝によりて、家庭はニコく高天の原の神遊びも斯くやと思ふばかりの圓滿であつた。明治三十七年一月、翁逝去の後は、財産一千萬圓に近しと稱し東洋で第一の船主はと問へば、翁を以て指を屈すると云ふ程で、現代も相變らず、家運は旭日東天に登るの有様、而して當主の

人格高きも、翁の薰陶其宜しきを得たると、翁の宗教撰擇に最も良しきを得たるとにある。讀者諸君、左の一項を御一讀下さらば、翁の立志も亦黒住教後學の参考にありませふ。

借翁は三十年や四十年にして如何して驚くべき巨大の富を造りしか、定めて株式か米相場に手を出して一攫千金を得たのであらうと誰でも想像するが、決してさうでない。曾て東京の時事新報に、翁の大成功談が掲げてあつたが、翁の立志は、黒住教の御訓誠七ヶ條と、道の乘三十言に據れりとして、黒住教祖の實賤躬行主義が天下に紹介してあつたのを見て余は大に打喜び、早速翁を北區安治川上通二丁目の本邸に訪ふたのである。翁は翁の夫人もと子と余を迎へ、教祖宗忠の神の足跡を不言實行したことを説くこと中々詳らかであつて、こんなことを物語られた。

奥の間に掲げてある七ヶ條の額と、臺所に掲げてある道の乘三十言との額を外して来て、これを御覽下さい『これは私の家の憲法で御座います、これは私の家の寶で御座います』と前口上して置いて、偕私は攝津國尼ヶ崎町の生れで、貧しき渡世の者でして、日々尼ヶ崎町より生着を擔ぎ、大阪に策行賣をして居たものでしたが、着の買入れに參拾兩の金の必用が出来ましたので、豫て御ひいさにして頂く大阪船場のお華主先きに後家の主人が小金を貯つていらつしやるから、一時の融通を頼みますと、お易いこと、ヨシ／＼承知しましたといふて、早速參拾兩の金を間に合せて下さつた。其の時後家さまは、參拾兩の金を二つ返辭で承知して手渡しの際、伊三はん參拾兩の金も結構に違ひ無いが、もう一つ結構なものがある、進げませうか、これを疑はずに正直に守りますれば、

心も大丈夫に成り、家もどこのい身もおさまり、お金も獨り出来るのであります。懇に説き諭して與へて下さつたのは即ち七ヶ條と三十言の二つで、只今御覽のこれで御座います。それを押頂き持歸りまして、毎日拜見いたし、先づ毎朝生れ變つた心地に成つて未明に起き、手を洗ひ口をすすぎ、七八丁もありませんが中の島の劍先き迄日の出を迎へにゆき、日待を致し、東の天空を拜し、萬の物を活し育て玉ふことのお禮を申し上げ、夫より光明温暖を下腹に十分に呼吸致し、勇しき面白き楽しい心に成つて、歸へつて働き、隙あれば清き所で日光を呼吸するといふ鹽梅に、今日此年（七十歳以上）になりますまで、一日も缺がさず、一ヶ條に一語も疑をさしはさまずに、實は遣て來ましたお蔭で、無病長壽をさせて頂き、策賣りから川蒸汽の船長となり、世に出して頂きました

次第であります。思へば思へば誠に結構なありがたい御教訓で御座います。けれど猪口才に聴へてはいけませんと心得、自身獨り行ひ、人様には先方よりお尋ねで無ければ申上ませぬ、岡山の大元様へは、冬至と三月の祭と夏のみそぎには、屹度私が参りますか、店の者に代参致させるか、缺がした事はありませぬ。けれども物知りになりて、信心天狗に成りましては、お蔭はありますまいと思ひ、口よりは實行が肝腎と心得てごなた様にも申上げた事はありませぬゆゑ、御承知無いのは御尤です。尙申上げたいのは、三十言の七ヶ條のと、文字に拘泥ますと大變六つかしう御座いますが、實行して見ますと皆一つに纏りまして、心易く行はれます。假例ば本途の陽氣に成りますれば、陰氣も邪陽も慾も何も無く成り、面白き嬉しき樂しきばかりで、三百六十五日お正月の心で働き通

されるのであります。此位目出度き、御教訓は、私はまあ外にはありません。すまいと思ひます。』

●御道的商業家那須藤助翁

(一) 鎌足公の末裔

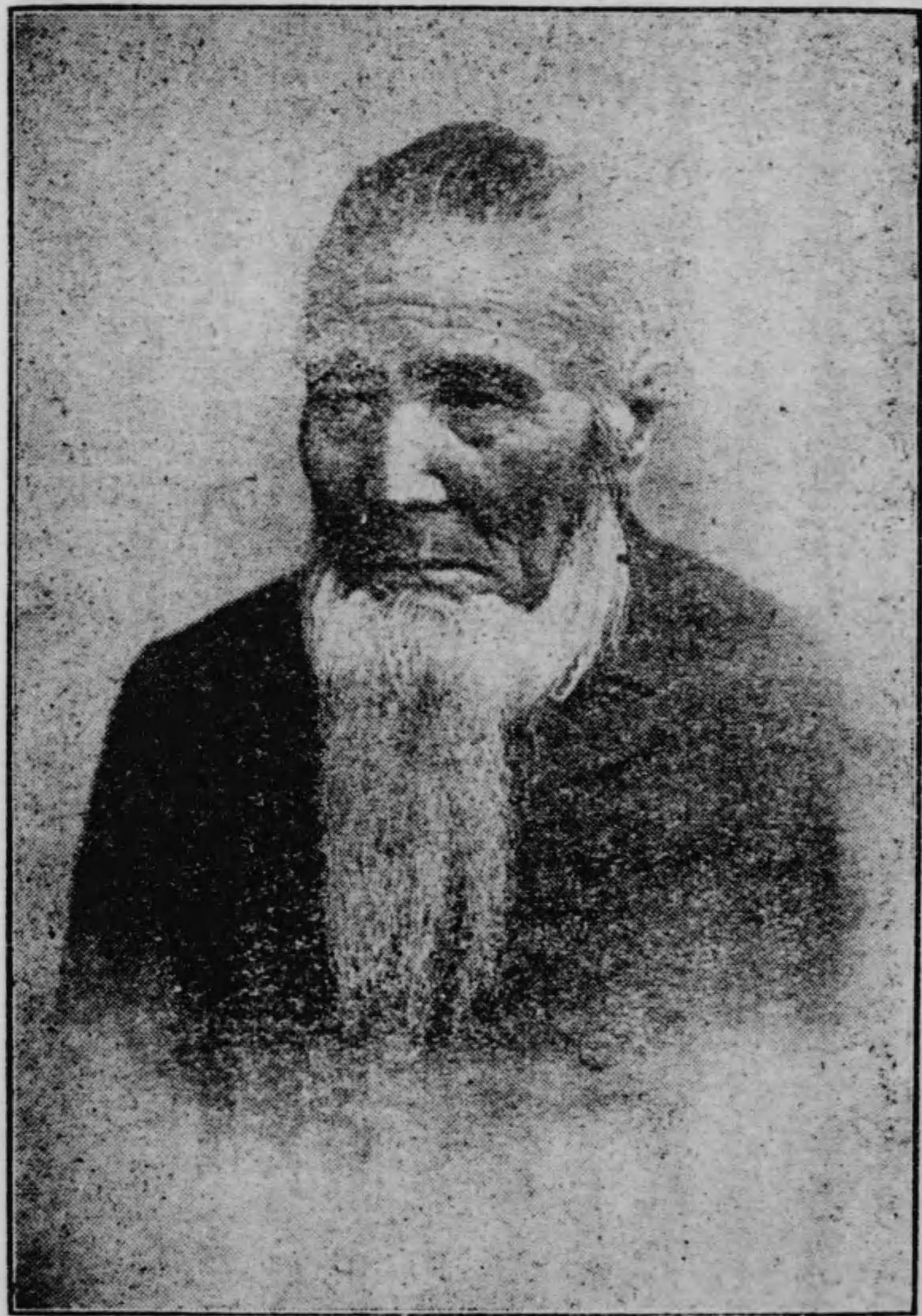
大阪の那須藤助さんは、東區備後町五丁目の那須よね子の亡父さんである。と掲げて見ても、現代の黒住教界でも實業界でも、御存知の方は多い。其の筈、表看板は女名前で、成るだけ控目に筆細に見せかけてあるからである。が、裏面から奥の院を窺つて見ると、驚く勿れ百萬分限の長者であります。更に深く立入つて聞けば、分家の那須又三氏（五十一

年)が參謀總長で、分家の藤井政治郎氏(六十年)が參謀總長と成られ外に別家六戸の主人も日々出勤し、雇人十八名を使役して、小倉、眞田着尺、袴、帶地等の大問屋を、『那須藤』の商號で、先代藤助さんの遺つて居られた其儘を繼續し、廣く商業界に對つて戦つて居らるゝ様子。其お手並も餘程堅實で、却々信用も深い。これだけ口を利くと、讀者諸君の中には、ハハア夫の那須さんかと思ひ出される御方もあらう。實業家も直ぐ合點されるだらう。が、も一歩進んで前の贈權大教正、今の贈大信教那須藤助さんと云へば、古い御道の教師信徒方には、成程あの人かどすぐ御判りになりませう。

この那須藤助さんの一世一代の物語は、却々波瀾が多くて面白く、黒住教の後進者も實業界の後輩者も、これを熟讀すれば參考に成る事が多

いだらう。藤助さんは御道を主人より仕込まれ、一舉一動御道を脱した事の無いといふ評判高き實踐躬行家であります。

藤助さんは岡山縣備中國都窪郡早島町那須伊平氏の次男で、文化二年酉十月十二日に生れられた、此家は身代は無いやうでありましたが、却々の舊家で、鎌足公の末裔で、公の十三世に須藤下野權守貞信と申す方があります。此方より六代目の孫が那須武者所資宗と申しました。ところが平治の亂に京都で戦死され、夫より十七代目が宗徳と名乗り、善右衛門と申します。此人に長男宗氏五郎兵衛といふ人がありましたが、此父子二人も又南北朝時代に船岡山の亂に討死致され、實弟與四郎といふ方がありまして、大變零落され、土佐の國に移住されたのであります。此人より五代目が吉兵衛と申し、吉兵衛の長男が伊平で、吉兵衛の父嘉



贈大教正那須藤助翁

平のしは祖先の跡を慕ひて備中に戻り、土佐屋と云ふ屋號を冒されたと云ふ話、鎌足公の枝葉ではありますけれど、連綿として血統は今日に及んで居ると云ふ立派な歴史を持つた家柄であります。

(一) 注ぎ込まれた御説教

藤助さんは家柄の生れでありますけれども、前に申しました通り身代の薄き處へ、次男であれば備中總社で志保屋と稱し、堀和助といふ足袋と質屋を営む家に奉公に往かれたのであります。ところが主人は大の黒住教信者で、毎朝早く起きると手を洗ひ口をすすぎて、東の大空に向ひ天照大御神を遙拜致し、日の出を待つて光明温暖を呼吸し、下腹に氣を納め、夫より奥の間に祭る神前に對ひて、必ず神言を唱へ、又隙あれば戶外清らかなる所に出で、日光を吸ひ、夜も又神前に跪きて一日の

一舉一動を奉告して感謝されると云ふ風でありました。爾して了れば一
 家族を並べて、御七ヶ條と道の葉三十言とを朗讀する、説教を聴かせる
 等、斯く爲すこと長年一日の如しであつたのに、藤助さんの小さい胸は
 グツト感化されたのでございます。中にも説教中の『迷へば魔寄る、一
 心は一神なり。何人と雖ごも一事一業一心に行へば、一心は即ち天照
 御神と一體にて生たる心なり。心活されば肉體も活き、肉體が活きたれ
 ば行動が活き、萬事悉く成就せぬと申す事なし。若しこれに反して、
 心死ねば肉體も弱り、爲す所の行も悉く死ぬる。これ天に對し奉り、
 親神、天照大御神に對し奉り、これ位大不孝は無し、天地は親神の懷
 にして活物なり、天地間に死と申すもの絶てなし。天は死を與へず、
 我より殺すものなり。活きるは天に大孝行、活きるは親神の大御心、萬

事活せば無上の信心なり。信心とは、我心を天照大御神の御分心と確信
 して、御大切に奉安し。かりそめにも御分心に背かぬやうするが信心の
 奥義なり。毎朝心が生れ變つて働くのは、お道信心の行なり。心が、大
 御神と確信すれば、神と御一體にて、神人不二に成れば先見の明も出來
 る、何事にも失敗はせぬ』と、しばしば聞く説教に非常に感奮し、それ
 より活るといふ事の主人の説教のみに一心に着眼し、大に之を工夫修
 養せられたらしい。其結果頭腦が餘程明晰になり倍々主人に用ゐられて
 どうく支配人と成られました。爾來主家の商業に奮闘中時勢は進み
 教祖宗忠の神や赤木忠春翁等の豫言の如く、制度一變して維新開明と成
 り、明治の大御代が生れて來たのであります。で藤助さんの喜びは一通
 りでなかつたそりでございます。

(三) 五十八歳で立志上阪

藤助さん主人に申して曰く、世の中が大に移り變つて來ましたから、獨立させて頂き、爾して大都會に出して頂きたい、到底田舎では駄目でありませぬ」と云へば、主人は驚愕致し、何分其時代は改まつたとはいへ現代とは違ひまして、大阪に移轉するといふやうな事は、今日の海外に渡航するやうなもの、殊に地方は大阪東京のやうに轉住するのは隣より隣へ一跨げにゆくやうな譯のものではありませんぬから、却々許さぬけれども藤助さんは、お道の修行で頭腦が明晰に成り、例の先見の明で先きが能く見える、大都會でなければ活きた大働きは出來ぬと見通しがついたから、種々懇願した結果、主家に一切迷惑は掛けぬといふ條件の下にとうく、大阪行の願が叶ひました。藤助さんの喜びや察すべきであり

ます。けれど妻子携帶で大阪にゆくのは案じられるから、妻子は商業の見通しがつくまで残し置かねばならぬ。其の代りに敏腕な丁稚政吉（前掲藤井政治郎氏）を附けて遣るといふ又候の條件に、一寸困つたが詮方なくこれを承諾し、愈々暇を頂いた。が、主人は根が反對であるから資本金は愚か旅費も小使も與へて呉れぬ。併し藤助さんはお道の修養が積んでるから、それはく奇麗な心で、資本金杯には少しも頓着はせぬ、無病で活きくさいすれば働いて天より頂くといふ決心で、平氣の平左然るに主人は藤助さんよりお道の受方が淺いから、未だく拜金の根性が抜けぬと見ね、藤助、お前に金は與へぬが、成功の上返金の堅き約束にて貳千圓だけは、貸して遣る」との言葉が下つた。そこで思ふに、求めずして先方から仰しやるのは天の命令と、厚く受け押頂いて拜借致

し、支度を整へて妻子を後に見て丁稚政吉と二人連で、大阪へ上つたのは丁度明治三年でありまして、年は五十八歳でございました。

お話しはいろいろに混じりますが、外の宗教を信じたり他の神さまや佛さまを信する一般の方で見れば、中老を過ぎ還暦に近き五十八歳にも成れば一寸老ぼれ小口で、活氣も元氣も何も無く、マア御隠居さんといふ時代で、何も歎も忤に遣らせて、中風症でも無いのに半身不随といふ渡り方が普通なのであります。然るに藤助さんは、お道の練り方が良く、お道の捉へ方が可いものでございますから大元氣「なに五十歳が定命だの老いては子に従へだのいふ教訓は、人智によりて作爲した印度支那の死んだ教育である、我が黒住教祖の訓育はそんなものではない。天啓によつて開闢原始の教其儘の、混り氣無きすがくしいかながらの道であ

るから、これに基けば天然其儘の日本魂である。それが年の爲めに老いはれるだの、人間術で年齢を定めるだの、生きながらにして死に近きだの、結構に天より頂きたるこの身心を四百四病の物の器物に心得て居るのは、心得違ひもく大心得違ひじや、以ての外のことである。言語同断である」といふて、其の話に移ると机を叩き膝を叩いて憤慨され、天に對してこれ位い濟まぬことは無いと叫ばれる。其時の勢といふものはさながら鬼神の如く、其音聲は迅雷轟き疾風叫ぶといふ有様であつたさうであります。

右のやうな調子でありますゆゑ、老人嗅いごころの騒ぎではありませぬ、子供上りに心得て、萬事が血湧き肉踊る血氣盛りの青年の處作であつたといふことであります、現に大阪京都あたりには、當時を知つて居

らるゝ信者もありませう。全體お道は、この元氣が第一であります。これは、當然のことで、別段珍らしくは無いやうなものゝ、一般の人々がこの世に處してござるのを見ると、ごふも此の元氣の一點が不足ではないかと思はれてなりませぬ。

(四) 御道的商賣

さて藤助さんは大阪に來られて、今の地に小さな店を借り受け、前に申しました小倉、眞田、着尺、袴地、帶地の小賣を初められました。が、大阪でも何所でも、お道を知らぬ商家は、大抵商賣の掛引に空言をいふものと誤解致し、相手次第で掛直を申します。りして之を常のやうに思て居りますが、藤助さんの商業は、お道其儘で、利益を頂くには幾らと定めて、直段を表した以上は揚げたり下げたりはチツとも致れませぬ

で、凡ての遣り方が堅實で實着で、御七ヶ條、道の栞三十言、其他 教祖の御旨に基きこれを標準とされ、これより割り出して一家の憲法を編出されました。こんなのでございます。それは

正直に信用を重んじ、正義を尚び、人權を重んじ、下腹に力を容れて元氣活潑に姿勢を正し、禮儀を守り、入り來る客は悉く 天照大御神の御分心を頂く人様なれば、八百萬の神さまの御入來と崇め奉る心持になれ。業務は堅實、持久、沈着。空想を排斥すること。空論に時刻を費消せざること。生意氣に成らぬこと。規律を正しくして下劣の行爲を以て人に見下けられぬやう。金錢は天の預り物なれば大切に取扱ひ、一文と雖とも粗末にせざること。

等自身に定めて自身に行ふて來られたが、大商人は別ものとして、小商

人にこんな心掛けを持つて、實際に行うて居る人は、雨夜の星程もござ
 いますまいと思ひます。處が其通りで、藤助さんに近づいた人、交際し
 た人は『妙な人だ變人だ』と評判致します。お道の人々でさへ、六つか
 しい先生だ、怖い先生だと異口同音に噂いたしました、今でも怖い先生
 と申さば大分記憶に存して居る人もあるらしい、否澤山ございます。去
 りながら、正直の誠心ほごありがたきものはございませぬ。最初は普通
 の商店のやうに賣れませなんだが、年々歳々藤助さんの親切と正直と手
 堅いのが、ポツ／＼知れ渡り、當時志保屋と申しましたので『志保屋の
 品物は掛直が無くて良い、あの店の親爺は堅い、白いものを黒いと云は
 ぬ、人を欺さぬ、安心だ』といふて、客が殖ゆる代物が捌ける、爾して
 買先も神さまと思ふ扱だから、先方も大に信じ出し、賣つて呉れ、捌い

て呉れど、仕入の注文せぬに澤山なものを突きつけて送つて来る、代金
 は何時でも御都合の好い時に拂つて下つて結構でござるといふ鹽梅。そ
 こで融通は十二分につき、金は幾らでも儲け次第といふ調子に打向ひ、
 大八車でポツ／＼歩み出す主義が周囲の仕入先きや相手の客のためによ
 ち毀され、急行列車で猛進の勢となり、資本は殖ゆる買手は増す、到底
 も従來の遣り方では遣り切れぬといふて、廣島より代物仕入の便利を主
 とし、傍ら一般交通の便をも計り、八十六噸の汽船一艘を購入し、大勢
 丸と命名して、大阪廣島間の海運航路を開かふるに至つた、これが抑々
 廣島汽船航海の初めて、藤助さんは實に其の元祖でございます。天運と
 申すものはありがたきもので、十年の西南役と成りまして、此船が入用
 に成り、御用船に採用されました、戦争が濟むと、大阪商船會社が生

れて、廣島航路が同社に合併される。かう云ふ風で、爲す事くが悉く成就しました。加ふるに借宅は自分のものに成る、更に土地建物を買入れて業務を擴張する、小賣を止めて廣く卸し賣の問屋をする、と云ふ風に、トン／＼拍子で盛運に向ひ、遂に大商人の仲間に加へられました。

(五) 成效して益信神

然れどもこゝが藤助さんの偉い所である、何であるかといへば、本を少しも忘れないで信仰を倍々はげみ暴風雨であつても疲れであつても、規定の會日には長の月日一回も教會所に參詣して説教することを缺がした事が無い。怠つたことが無い。爾してモ一つは、昔を忘れぬやうにと云ふて、毎日必ず箒を取つて門を掃除される、室内の塵を叩かれる。夫から尙申上たいのは、京都吉田山神樂岡の神樂岡教會所は却々大切であ

る衰へさせては、教祖に申譯が無い、赤木先生に濟まぬと云つて、同所長を兼務された。ろして京都人士に大にお道を説き込まれたが、却々注いせぬといふて概かれたそうです。こゝに又面白い大元氣な話がある、藤助さんは徒歩主義で、歩行するにも死んで歩くのと生きてあるくのと二つがあると云ふて居られる。下腹に力を容れ、手足に力を入れ、曲まず真直ぐに向いて活歩せねばならぬ、一舉一動活きねばならぬと、八ケ間敷仰しやり、爾して自分は活きて働くお蔭で、七十歳に成つて此の通り眼鏡が入らぬ。『七十の春になつたる嬉しさのあまりにめがね隠居しました』とは、始終人に聴かされた歌でありました、又或時神樂岡教會所に詰切の節、大阪の店が非常にお金が儲かつたので、番當は先生に喜ばせんと思つて報告に往けば先生曰く『聞かせるといふ志は

忠實であるが、油断をしては成らぬ。神さまにお告げ申上げて、一刻も油断せぬがよい。人間は好運とか善事の場合が大事であるぞ、大抵最後に失敗するのは此時の油断にあるのであるから、放心せぬやうシツカリ神さまを捉まわて沈思黙考せねばならぬ」と、却て懇ろに諭して返へされた云ふ話もあります。

又或時損失が有つたので、主人に申譯が無い、大層叱られるであらうと思つて、大に心痛して報告に往くと、藤助先生双手を打鳴らしてありがたいと喜ばれたから一寸合點ゆかぬゆる、斯くくと打明けて申せば「人間の修養は難の有る時が肝腎である、お前等が神さまのお蔭で難に遭つた事が無いから、結構過ぎて危険である、然るに損をさせて頂いたから可い修養が出来た、此修養はお金で求められぬよ、お金は勤勉すれば

は何程でも頂かれるが、後を守るのが六ツかしいから、此修養をさせて頂いたのである、己は何とも云へぬ有り難い仕合と思つて、神さまにお禮申上げた次第である」と反對に申されたさうでございます。

(六) 分家二戸別家六戸

個様な塩梅に、一事一業お道を放さず、實踐躬行された結果、京阪のお道は當時却々盛になり、家運は旭日登天の勢で、教導職は少教正まで進み、家は百萬の富を作られ、剩さへ分家二戸別家六戸、孰れも歴々の顔揃い、一の分家は前にも申した參謀總長の那須又三氏とて、陸軍歩兵大尉で、日露の戦争に大に功がありました、金鷄勳章功五級を頂いて居られ、二の分家は同じく前に申した藤助先生の上阪に附隨して来た丁稚、今は藤井政治郎氏と申し、立派なタヲル問屋の旦那さま。此人達も

別家六戸の人々も、本を忘れぬと云ふ主人の主義に感化されて、未だに日夜本家に参勤し、主家の商業を専心保護して居られます。模範的家庭とは、蓋しこんなのを云ふのでしやう。

さてお話しはいろいろ出たり這入たり致しますが、藤助先生は無病長生の八十六歳で、明治三十一年九月十七日に歸幽されました。未亡人茂登子さんは、今に生存して居られます。當年八十七歳、矢張り主人同様未だ眼鏡を用ひられずに却々元氣で、小仕事も出来ます。尙ほ當主よね子（六十三年）で備中の實家を相続させてあります藤助先生の長男良作氏の息女藤子（二十年）を相続人に貰ひ受けてあります。此二人の家政を助けて居られます。雇人を併せて現在廿一人の大家族でございます。此家族は御神前を家の中心點と致し、教祖及び主人の訓育を守り、一家

はまことに圓滿に「ありがたき、うれしき、おもしろき」の三氣を備へて、日々を過し日を送つて居られます。未だく模範的の事は澤山ありますが、際限がありません。此邊で筆を止めて置きませう。讀者諸君斯様に大成功者の續出するといふ事は何とまあありがたい事じやありませんか、目出度い事じやありませんか。

不言の實行者岡橋清左衛門翁

大阪市東區船越町の豪商岡橋治助氏の養祖父清左衛門翁の葬儀は、昨十一月十三日午後三時、葬列及び一切の形式を廢し、南區下寺町の大蓮寺に於て執行せり。官公吏紳士紳商新聞記者等一千五百餘名参列いとも

嚴肅に擧げられたり。抑々翁は當年九十歳、今より七十八九年前裸一貫で大和より丁稚に來り、正直に働きた主人に愛され、後番當に進む、或日偶と思ふに、人には災難あれば神を信仰して神の加護を得ねばならぬと心附き、初めて信心氣に成れり、今よりまさに六十六七年前、堂島の太神宮と申し或はお席と申した時代にて、伊勢太神宮黒住講社の看板を掲げた本教激進の最中、猫も杓子も堂島のお席へ講釋を拜聴に參ると聞き翁も參聴したるに、折しも備前の黒住先生（教祖の事）御參宮の途次、御立寄遊ばされ、御講釋がある所。これを拜聴して信膽に銘じ、是より一心に太神宮を信じ、毎朝早起して日の出を待ちて光明温暖の氣を呼吸し、陰氣を去つて朝日の勇しき心になり、毎朝く生れ變つて働く事に成り、其結果別家を許され、遂に獨立する好運に向へり。

翁艱難の都度御講釋を守りて實踐するや、世人大に翁の言行一致を信するに至る、此に於いて家は倍々榮へ、信用は彌々まし、七十歳前後の頃は、鐵道、銀行、諸會社等の勃興には、翁の言大に用ゐられ、重役に推されしもの其數を知らず、而も悉く成功して、住友「藤田、鴻池等の次に指を折らるる長者と成り、遂に今日あるを致せり、又翁が治助といひし時代、人々「治助さんお金を作る秘傳を教はりたい」と言へば「ヨシ」お金はな、朝早く起きてお日さんの光明を吸ふて朝のお日さんのやうに勇み笑ふて日々暮し、無欲に成つて働き、無病長壽さへすれば、お金は獨り手に貯る、もう一つは商賣人は空言をつかず、正直にして居たら資本は入らん」と答へしとぞ。是れ正に本教の不言實行者ならずして何ぞや。

なほ翁は、洗面等に湯を用ゆれば人間の元氣衰へると言ふて、四季冷水浴主義、徒歩主義なりき。

鐵道翁大塚磨氏と道の葉三十言

大塚磨さんと云へば、大阪實業界の名物紳士で、今の南海鐵道會社長大塚惟明氏の亡父で、我國私設鐵道の元祖とも稱すべき鐵道創立の元勳者である、大きな鐵道では山陽線、夫から讚岐線、關西線、小さくても我國最初の阪堺輕便鐵道といふ鹽梅に、指を屈て敷へたら、未だく澤山あるが、孰れも其起業者で、重役の椅子を占め、斯業の偉人であつた、前世紀時代に鐵道に關係し、株券を持つた人は磨さんと云へば誰で

も知つて居る。

磨さんは、日本魂の満ちたる九州男子で、生れは熊本縣阿蘇郡小國郷の郷士大塚保氏の長男で、細君はおきわと云ひ、今の北里醫學博士の叔母に當るといふ。磨さん大阪に来てからは、沈思默考の人と生れ變つたが、其前は中々そうで無い、今の基督教が切支丹宗門と云つた時代に、天草騒動の殘黨に切支丹が多いとて、西洋の宗門が跋扈しては國力が衰退すると云ふて、極力退治に努めたが、何分精神的のものゆゑ、肉眼で検査は出来ぬと言ふて、磨さん一ツ智慧を絞り出し、耶蘇の大きな像に金網を冠せ、これに橋を架け、近郷一萬有餘の老若男女をして之を渡らせ、土足で耶蘇の頭上を踏ませしめた、若し信仰ある者なれば、到底實行は出来まいと思つたが、一人も異狀無く踏切つて通つたので、安心

の胸を撫で下したといふ豪ものである。今に磨さんを稱して鐵網の親翁さんと傳ふるのは、是より起つた名稱であるさうな。

維新後其筋より斷髮令の發せられた際、三百有餘の郷士と共に、直にチヨン鬚を切り落したが、二千餘の百姓は、彼是苦情を唱へ小言を言ふて思み嫌ふたのを、懇ろに諭し、若し應せぬ者あると、左手で首筋を捻ぢ壓へ、片つ端から鉄で鬚を斬り落したといふ猛烈な人であつた。

漢學も國學も獨習で、劍道は熊本で教はつた。修行中は、熊本の師匠の宅まで十七里もある山奥の寒村から通學し、斯道のみは蕙奧妙味を得て居たらしい。社會的事業としては、學校、病院を創設し、文武兩道を大に奨勵されたさうじや。

個様な鹽梅に。國家的社會的に盡した爲め、財産は無く成る、胃病に

罹る、恰も四十歳であるから、意志の弱き界限のものは來りて、厄年に近ければとて注意すれど『なに馬鹿な』と言つて一向平氣。醫師の勧めによりて諸方に出養生したのが三年間、此間に福澤論吉翁の書を繙き、一家の富は國家の富強、未熟の學問は實際を没却すなど、大に自得を開き、更に一休和尚の書を読み、中にも『なせばなるなさねばならぬなるものをなさぬはおのがこゝろなりけり』の歌に大に感じ、實業に努力する事に心機一轉し、養生三年で家に歸つた。

磨さんの家は代々眞宗の固門徒で、神國に生れながら祖先の神々様を拜禮するのは雜業と唱へて、チツとも頓着せなんださうな。只印度傳來の佛さんを先祖のやうに誤解して、朝夕印度の風に習つて珠數を爪繰り佛さん許り拜んで居るといふ家風であつた、所が我國體に氣のついた磨

さんは、さてもく我々は心得違ひをして居た。自身愛國を唱道しながら、印度の佛さんを家の中心點とするは大間違ひ、速に祖先に奉告し、神式に改めんものと大に自覺し、家族にも説き諭し、氏神の神職を聘し我國の國風に從ひ、代々の祖先を神祭式に復古したのは四十二歳の時であつた。

サア一切洗ひ變へ、洋服も捨て、勞力する事に極め、土運びもする何でも歟でも稼ぐ、こう遣つて刻苦經營したが、田舎では追つ附かぬと言つて、小金を懐にし大阪に來たのは明治十六年十月二十五日。モサ引に曳摺り廻られ、鞆の鈴木といふ旅人宿に尻を据へた、當時大阪では住友の廣瀬宰平氏が實業界で覇振を利かせて居ると聞き、早速訪問して意見を叩いて見ると、廣瀬氏曰く「大阪は生馬の眼を抜くといふ位の激しき

市場なれば、裸一貫なればイザ知らず、小金を携へたものゝ稼ぐ場所では無い、無一物に成るとも成功は覺束なければ、速に歸るが可い」と宣告を與へられた。されど落膽せず「なせばなる」の初一念を守り、大阪に永住と定め、中之島三丁目の宇和島藩の倉屋敷(今の大阪朝日新聞社)の留守番と成り、實業界に活動し初めた、磨さんは正直にして石より堅き男なれば、片言隻語といへど空言は云はず、言つた事は必ず行ふ、違約はせぬ、眞に實踐躬行家であれば、忽ち何人にも信用された、當時大阪商船會社に内輪揉めがあつて、破裂しそうであつた、有力なる株主等は磨さんのやうな意志堅固で正直な人を推せば、圓滿に治り、爾して會社の利益にも成るだらうと言ひ出したのが事實と成り、一躍して副社長と成つた、然るに可笑のは、社長は前年宣告を下した廣瀬宰平氏であ

つた。十八年九月倉屋敷が朝日新聞に賣れたから、北濱に移りて一戸を構へる、手腕は振ふ、正直の花は蕾を開き、春風に清香を放ち出した。信用は倍々厚く成る、磨さん又運輸交通の頭が非常に敏活なるより、前に掲げし如く、私設鐵道創立に參與し、悉く成功して、今日あるを致した。正直の誠の光程ありがたきものは無い。申迄も無く、正直は金より尊きものと知らねばならぬ。

抑々私の磨さんに初めて會見致しましたのは、今から二十有餘年前でございました。磨さんは八方美人は大嫌で、贅辯は無く、要領を掴み手取り早く、所謂急轉直下といふ應接振りでございます。所で無駄錢は壹厘と雖も出さぬ主義でしたから、大變蔭での評判は宜しくございませぬ。殊に口善悪なき大阪人と來ては、三文の價値無きやうに申します。

其筈です、空言を商賣の利器のやうに心得て居る娼妓主義と、九州男子とだから、尤もじや。けれども私は思ふに、如何にも、一風變りものだ一舉一動に御道言葉や御道の處作が現はれて居る、如何にも妙である、不思議である、思へばたまらぬから、胸襟を開いて、實に貴兄のお言葉の中に又行動の中に、私の信仰する 宗忠の神の教が含まれてあるやう思はれますが、何等か關係ありますかと問へば『お察しお尋ね御尤です之には御覽に入れますものがある』と言ふや、奥の間に往きて卷きものを携へ來り、押し頂きて私に示したのは、道の乘三十言でありました、私は之を見て何とも云へぬ嬉しき難有き感に打たれ、膳手をうつて落涙したのであります。磨さんは襟を正し語を改めて曰く『是れ御覽、文字は筆者の及ばぬ點もあるかと忍察致しますが、文字以外に面白味が幾ら

あるやら判りません、所謂る言外の妙味が澤山含まれてあります、實行
 しますと賜を噛んでゐるやうでございませう。噛みしめる程美味に、思は
 ず舌鼓を打つのであります、中にも難ありありがたし、御陽氣を吸へ、
 阿房に成れ、活物を捉わよ、無慾に成れ、足る事を知れ、氣分は朝日の
 如く勇しくせよ、天の御擬作を大切に勤めよ、の御言葉には、自分は最
 も感じたから、及ばずながら實行させて頂いて居りますが、自分程世の
 艱難苦勞したものはありますまい。到底も成功は六ツかしい、大阪三界
 まで恥を曝しに來たのかと、何回思ふたか知れませぬが、この難あり有
 り難しの御教訓で反省し、遣り通して來たのでございませう。御蔭で無病
 で日々楽しんで暮すやうにさせて頂きましたが、自分の親しく交る方が
 自分の身の上を教訓にあてはめ詩に作つて下さつたを一ツ御覽に入れま

せう』と言つて、見せて下さつた、私は今に記憶に存してありますから、
 判り易く崩して左に掲げて見ませう。詩の頭がございませぬから、文字
 は二三違つてあるかも知れませぬ、お察しを願ひます。

六十餘年艱苦身。

每經艱苦心更新し

老翁風骨與梅似。

又逢破眼微笑辰。

磨さんはこの詩を見せ、詩の心をこう云ふやうに講釋して聽かせて
 下さつた。『自分は六十四年間始終難が湧いて來て困つたが、五十過ぎる
 と現世の人で無いやうに老ひぼれるのは世間の普通になつて居りますか
 ら、五十過ぎて難に遭ひましたから到底も頭が上らず、成功は六ツかし
 いと諦め、世を捨て、隠居分に成つて小忤に厄介に成り、老ひぼれに成
 る筈でありました。けれども黒住教の教訓に標準ますと、左様な制限は

お立に成てありませす、二六時中御守り通し御活し通して活して下さる親神 天照大御神に大不孝と心得、例の難ありありがたしの教訓で、心の用の方を改め、これぞ我れといふものだらうと思ひ、神に縋り、其都度御分心に立歸り、新らしうくして参りました、御蔭で六十四歳に成り、人並の者にして世に出して頂きました意味です、詩では四の字が用ひられぬと申すので、六十餘年として下さつたらしい。爾して下の句は自分の艱難を寒氣に堪ゆる梅に例令へて下さつたので、結尾の一字が春でしたのを、春では詩に成らぬと或詩人は辰に訂正して下さつたのでございませす。眞に今から思ひませすと、夫の難は寒氣もく嚴寒ですが、嚴寒がございませしたから、是から春の楽しみをさせて頂けるのです。こう成つて参りますと、くどくしうございませすけれども、難は自分の身の

上に取りて誠に有り難くて身に泌み渡ります。大きな聲で申せば憚りませす、大阪は贅澤な所で、衣食住自由自在でございませすから、大阪生れの方は難に堪ゆる事は出来ませぬ。ナニ難に堪ゆる所の騒ぎではありませぬ、大阪人の根性は先づ遊びたい、美味ものが食いたい、美しいものが着たい、朝寝坊がしたい、夜遊びに往きたい、努力せずして、金を儲けたい、といふのが第一義で、労働したり、稼ぐといふ事が第二らしうございませすから、自分等と絶對に反對です、天の御擬作の教訓で、自分は壹厘の金が大切です、決して天の許さぬ事には出ませぬ。併し取り違へませすと惜みが掛ります。惜みがかよれば吝嗇に成ります。人は出すべき金は快く出さぬと、天に背くと同時に身の信用にも關し、切り詰めた小さな事より出来ませぬ。大事業には誰も相手に致して呉れませぬ。

これは修行上大事の場所でございます。夫から人間に慾がありませんと働かずに金が欲しく成ります。慾程立志出世の妨となるものはございせん。これも又大切な事です。斯様な事は文字や理窟では分るまいと思ひます。唯だ躬行實踐上で、無學文盲な私の感じた事でもあります。でございますから、大阪のやうな賢い方のお集りの所では、決してお話しした事がございませぬ。家内の外知りますまい。忤も知りますまい。忤は随意にお門違ひの耶蘇の學校を望み、川口の三一神學校に入學し、自分に對つては品行が良く成るからと辯解しましたから、黙許して置きました。が、無事卒業致しまして洋行を望みましたけれども、これは許しませなんだ。私は、洋行せんでも物は一から始むるが可いと論しまして、山陽鐵道兵庫驛の驛夫に遣り、日給貳拾五錢を頂かし、獨立生活をさせて

見ましたが、昇進して今は讚岐鐵道の可なりの役を勤めて居ます。こんな事は大阪の人では出来ずまい。尙ほお尋ねの忤と宗教違ひの事は、最後に遺言して置きますから、大丈夫です、死すれば神に祭らせまさら、此邊に御心配御無用御安心下さい』

斯くて明治三十八年四月、息惟明氏は父の足跡を履みし結果、大に實業界に用ひられ、南海鐵道會社の専務取締に當選するや、磨氏は大に喜ぶ間も無く、四月十一日逝けり、時に年七十有四。維明氏至孝、父の命に従ひ壯嚴なる神式を以て營葬せり。此の如き偉人の裡に、隠れたる本教の實踐者を見出すは、吾人後進の如何にも愉快に堪へざる所なり。

●隠れたる篤志家大村直七翁

京都吉田山神樂岡に鎮座します、宗忠神社の御再建造營の事に力を盡してから、其名を天下に轟かした、大村直七翁は京都市上京區室町丸太町下り南へ入る紅染業者の主人である。年齢は本年六十五なれど、陽氣満ち、活氣溢れ、姿も心も血の湧く、青年に變らぬ。鑑録として現代の實業界に活動して居られる、一代の成功者として隠れたる篤志家として世に紹介するの價がある。美点の二三を摘み掲げて見やう。

翁は江州の人藤井庄七の三男で母はおかつといふ。二歳で大村治郎兵衛の養子と成つた、養母はおすみ餘り年を経ぬうちに、養父治郎兵衛は死し、養母に育てられた、この養母は大の黒住教信者であつたが故に人

は天照大御神の御分心であるなど常に説き諭し聽かせたことが却々親切であつたから、子供ながらに化せられた、自信を強く成つて知らずく我を離れて誠の心に立歸る行動を取る方針に向つて進いたのである。けれども家は貧しきが故、榎木町烏丸西へ入る紅染業川瀬徳兵衛氏方へ丁稚奉公に住むことに成つたのは十一歳であつた。

主人も中々篤志家で翁に訓育するのが懇切であつた、爾來主家に忠勤二十年、朝は午前四時に早起し、夜半に寝て一事一業も怠らぬ事一日の如しであつた。三十一歳の時に主人より暖簾を分けて貰ひ今の地に別家し獨立の生活を初めたのである。店員時代より勤勉の聞け高き翁は矢張り主家に仕へて居た通り午前四時に早起して、東の大空に對ひ天照大御神を遙拜し日の出を待ちて、日光を呼吸し下腹に納め又室内の神前に額

つきて大祓を唱へ向ふ日の天職に誤り無いやう誠を以て勤め行なはしめ玉へど天照大御神さまや教祖宗忠の神さまに縋り置き爾して朝飯を押し頂きた天職に従事するといふ遣り方であつた。數年の後如何した譯か主家に居る間に一回も失敗を取つた事の無いのに一千數百圓の損失に罹つたのであるから別家の力としては堪らぬ普通なれば意氣鎮沈するが當然であるが常にお道信じ教を以て心を練り鍛へたる翁は却て喜び、これは難あり有りがたしといふのである、この場合が大切であるとして沈視默考し自分は主家に仕へて居た時代は總て神さまの物と思ふて萬事を扱ひ來りしも別家させて頂いて後は知らずく我物に致し油斷をしたので神さまより御試験を蒙むつたのである。嗚呼ありがたいくと言つて本に立歸り一層勉勵して見ると、今度は爲す事として成就せんといふ事は

なしで、家運は朝日の豊坂登るが如く榮へ、未だ三十年経つや經たずに數拾萬圓の富を作つたのである。

翁は却々隱徳家で神社、佛閣、學校其他慈善事業等國家的社會的に年々寄贈する高は數千圓の多きに達するさうである。日露戰爭の際軍事公債募集の節も國家の爲めに盡すのは此時であると言つて黙つて數萬圓の額を受けて公吏を驚かせたさうな、濟生會には匿名で參千圓を出し知らぬ顔で濟し込んで居る、萬事がこういふ遣り方である、夫の吉田山神樂岡の宗忠神社は精神界の祖神ばかりでは無い此神さま在世中のことを國家として申せば王政復古の原動力とも申すべき勤王の方であり。維新開明の前驅者とも申し我國文明の卒先者の御一人であるが故に朝廷に於ても神號を下し賜ふたのである然どもお粗末な社殿であれば何とかして四

時國民の崇拜するやうさせて頂きたいと多年の宿望を抱いて居たが熟誠
 天に貫き人を感せしめ大計畫空しからず、同神社の神職佐々貴四十一氏
 を初め同市の川崎儀三郎、青山庄之助等多くの篤志家の賛助を得て神樂
 岡會といふのが成り全國の信徒會員に加はるる所で昔日の關係縁故によ
 り二條公爵を總裁に頂き從五位木村時義氏等の大援助があつて、拾萬餘
 圓の社殿は目出度竣成したのである。翁の名聲は倍々宇内に轟き翁の男
 振りど人格は一層高まつた。これが爲め宗忠の神さまの忠孝兩全の光は
 この世あらん限り吉田の山の大空に輝く國民教育第一義の活きたる、手
 本、活きたる書物は翁の篤志によりて大正の御代に初めて繙どくやうに
 成つたのである

なさがらはいつれの野邊に埋むとも

(書 紀)

たまはみやこのそらにとよめん

忠孝の誠心はかなめなり

(赤木大人)

あほぎ次第で末ひらうなる

序に

この歌は宗忠の神の高弟で神社に最も關係深き隠れたる勤王家赤木忠
 春うしが歴史を繙どきて前の一首を繰返へしに成り爾して後の一首をお
 詠に成り扇子に筆を執られ京都の信者に示された結構なお歌で翁の家に
 必ずある筈なれば神社のことに因みて書き添へ置きたい。

モ一つ大村直七翁の偉のは、本を忘れぬといふことで丁稚から成功し
 て數拾萬の富を作つても矢張り毎日一度は風呂敷を肩にして鳶が空に輪
 を描くやうクル〜と華主を廻り必ず吉田山の宗忠神社に参り拜禮の後

お手傳をする籌を携へて境内の掃除をする爾して六十五歳であれど未だ
 徒歩主義は變へぬ。近來家族の勸めにより急ぐ場合だけ電車に乗る併し
 交際の外は一回も人力車に乗つた事は無いさうな、夫から中心點は離さ
 ぬ、それは一家の中心點は我家の御神前、町内の中心點は産土神御靈神
 社、宗教の中心點は教祖宗忠の神、國家の中心點は伊勢神宮と皇室、個
 様に仰き奉りて動かぬ。氏神御靈神社へは毎年一月一日に保存金といふ
 て壹百圓持參、早や十五年實行して居るから元金だけでも千五百圓貯つ
 てある。毎年一回家族打揃ふて岡山大元と伊勢參宮は欠さぬ。本年詣れ
 ば三十七回目で邪陽參りて無しに眞の陽氣に參つて國家と社會の爲めに
 祈るのみである。

大正三年三月廿五日印刷
 大正三年三月廿八日發行

定價拾五錢

不許
 複製

發行兼著者

武田彌富久

印刷者

濱田正夫

印刷所

濱田日報社

發賣所

大阪市北區東梅田町
 名古屋市南吳服町

宗徳書院
 興風書院

電話東四九六四番
 大阪一四五三七番

大阪市南區安堂寺橋西詰南へ入

大阪市南區問屋町五十五番地

大阪市南區安堂寺橋通一丁目一番地

Handwritten text in a decorative square stamp, possibly containing a date or initials.

Faint, illegible markings or text on the right page, possibly bleed-through from the reverse side.

終

